

『仕事』ということ

愛成学園 施設長 片山泰伸

いつも人から耳にした話しをしてしまう自分がありますが、今回は、編集委員のスタッフから、「『仕事』ということ」という課題をいただいたので、その課題に自分の考えを書いてみたいと思います。

まず、『仕事』についてどう捉えるかということになると思います。私は、20歳に（故）田村一二先生からこういうことを、教わりました。

『仕事』は、捉え方として二つに分かれるんだよ。

一つは、『仕事』を『稼ぐ』と捉えるか。

もう一つは、『仕事』を『他を楽にする』と捉えるか。この捉え方で、随分と違ってくる。きっと、その捉え方が、『メンバー主体か。』に繋がっていくのだと、今想います。

時代背景を考えてしまうと、これまで障害児（者）と呼ばれる人達の暮らしについては、施設の中で暮らすということが普通のように進められてきたことも否めないと思います。

この動きについては、保護者を含め、我々スタッフ、行政の方達、そ

して、地域の方達も当たり前のように受けとめていました。私自身も、その1人でした。

ある意味、その考えは、お互いに障害児（者）との関わりを、善意に解釈しているとも思われます。しかし、そこには大きな落とし穴がありました。つまり、ご本人自身の意志を確認できないまま（しないままに）、周囲の人達が『生活の場・人生』を決定してしまったということです。

ご本人の意思を、どれくらい確認していただろうか。

この大きな落とし穴が、『入所施設利用メンバー』と『福祉に関わるスタッフ』との生活の質に隔たりをもたせてしまった結果を生んでしまったのだとも思われます。

下記の問いかけに皆さんは、どう応えられるでしょうか。

「あなたは、入所更生施設で、どのくらい暮らすことが出来ますか。」

応えは、明確に返ってくるでしょう。しかし、どうして多くの人達が理解出来る課題が解決できないままに月日が経ってしまうのか。きっと、地域の中に地域福祉の基盤整備がないために、誰もが、一見して解らないから実感できないのでしょう。

しかし、多くの障害児（者）と呼ばれる方達は、『家族と暮らしたい』『地域で暮らしたい』『友達と遊びたい』と願っていると思われまます。きっと、これまで福祉に関わる方達・ご本人が、いつの間にか、この事を諦めてしまっていたのでしょう。

一度に、これまでの流れを大きく変えることは出来ないと思います。しかし、これまで当事者の方達と関わる中で稼がせていただいた「『仕事』ということ」を、今後は、当事者の方達の人の誇りの支援に繋げる、他を楽にする（楽しむ）ということを「『仕事』ということ」として理解しなければならないと思います。

変えようと・変わろうと。ご本人の願う人生が送れるよう、我々スタッフは『仕事』をそう、考えていきたいと思っています。諸機関の方達が、ご本人のことで向き合い、伝え合い、話し合う、そんな場を創りあげていきたいものです。よろしくお願いたします。

2002.11

地域で働こう！

生活寮メンバーを中心に地域で就労し、がんばって働いているメンバーがいます。仕事の系統はさまざまですが、地域の人たちに支えられながら、がんばっています。



森本玲子さん
八百屋さんでの野菜の袋詰めの仕事をしています。マイペースでがんばりムードメーカーです。



松井富子さん
小平の施設の清掃をしています。仲間にも助けられ、時にはプライベートの相談事にもしてもらっています。



鈴木礼子さん、岩本スタッフ
土田直美さん、神沢真理さん
中野区の施設の清掃をしています。他にも、石長さん、石川さん、と一緒にローテーションを組んでがんばっています。



渡来清子さん
前回紹介したスポーツ就労のスペースさんで月2回の封入作業を固定メンバーとしてがんばっています。

他にもがんばっているメンバーがいます。次号にまた紹介したいと思います。